

# マルサスと英國古典派の動態理論

——特に價值論との關聯に於て——

高橋次郎

## 第一章 緒論

經濟學の研究に志向する者の關心は、現に吾々の住む社會の經濟に就いての認識に到達することに在らねばならない。然るに、現實に觀る經濟社會は、複雑なる具體的特殊性と錯綜せる不斷の變動性とを有する。斯様な經濟社會に就いての認識を成功的に導き出さんがためには、如何にすべきか？ 歴史學派は「國民經濟」の研究を提唱して、直接に具體的特殊性にぶつかつて行つて失敗した。又、實業家は、實際社會に就いては學者よりも良く知つて居る。しかし、彼等は「私經濟」的觀點に閉ぢこもる事が多いのみならず、又現象の表面だけで満足し勝ちであるの恨みを持つ<sup>1)</sup>。故に、吾々は是等の前者の轍を覆む事なく、經濟社會を客觀的に「社會經濟」的に研究し、しかも單純に現象の表面をなで廻す代りにその本質にまで掘り下げて經濟法則の確認を行

1) Gustav Cassel, Fundamental Thoughts in Economics. 1925, pp. 3-7.

はなければならぬ。それがためには、「抽象」の助けを借りて分析を行ふ。「具體的なものを根據として置き、非本質的なものと思はれる特殊性を捨象する事によつて、或る具體的普遍即ち屬又は力及び法則を抽き出す事——これ即ち分析的方法である<sup>1)</sup>。」分析の終極點は、綜合の出發點である。綜合によつて、吾々は、抽象から具體へと上向する事が出来る。

理論經濟學は、固より、抽象的科學である。だが、最も單純な抽象が斯學にとつての自己目的ではない。それは、たゞ現實社會の認識のための手段たるに過ぎない。古典派の經濟學は、富の諸形態の分析によつてその内的關係を把握しようと努めた。が、その主力は靜態的・均衡的研究に注がれた。又、後に發生せる主觀學派も均衡理論の建設に専念した。

併し乍ら、戦後の經濟的變動並びに發展は、動態經濟の研究の必要を教えた。だが、これは均衡理論即ち靜態理論の無用を物語るものではない。その上に立つて、資本主義經濟の存在 (sein) のみならず、生成 (Werden) 又は變動の過程をも、研究しなければならぬ事を意味する。此處に新たに導入せられるものは、「時間的經過と、それに対応して發生する經濟的變動」である。吾々は、この經濟的變動の過程をも理論的に取扱はなければならぬのである。

扱て、動態理論の研究に際して、現實に生起する經濟的變動をば一系列の異質なる運動形態に分析する事が必要である<sup>2)</sup>。先づ始めに、これを「構成變動」と「景氣變動」とに分ける事が出来る。更に、前者は偶發變動

1) G. W. F. Hegel, Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften, im Grundrisse. neu herausg. von G. Lasson. 1920. S. 198.

2) vgl. Ernst Wagemann, Konjunkturlehre. 1928. S. 44—63.

と趨勢變動とに分け、後者は季節變動と景氣變動とに分ける事が出来る。けれども、經濟的變動を理論的研究の對象として観る時には、たゞ趨勢變動と景氣變動のみが表面に浮かび出て来る。そして、此の兩變動は相互に制約し乍ら、交錯しつゝ發展する。譬へて言へば、『景氣變動』と『趨勢變動』と言ふ二筋の絲が絡み合つて一本の完き姿に於ける『經濟的變動』と云ふ綱を作つて行くのである。吾々の動態理論の研究は、勿論、その中の景氣變動を中心に行はる可きであるが、然しそれは絶えず與件の變動即ち構成變動を考察の中に取入れる事によつて、益々複雑なる現實の經濟社會の變動に就いての認識へと接近して行かなければならないのである。

所で、主力を靜態理論に注いだ古典派に於いて、變動理論が如何に展開せられて居たか。これを次に問題として取上げなければならぬ。

私に與へられた題は、『マルサスと古典派の發展理論』であつた。私は、此の題の下に、英國の古典派の學者のみを問題とした原稿を書き上げたのであるが、それは餘りにも尠大なものとなり、削減を命ぜられた。殆んど二分の一に削減したために、茲に提出せる原稿は著しく最初のそれと異なる姿をとるに至つた。第一章として稍々詳しく述べた『動態理論』と銘うちたる方法的部分は、第二章に於ける Adam Smith, James Mill, John Stuart Mill の價值論及び動態理論と共に、割愛せざるを得なかつた。斯かる事情は、當然に、併察の必要をもつ所のリカドウの側に立つ Say の『販路説』、及びマルサスに組する Simondi の『所得不足説』にも觸れる事を許さなかつた。これ等の人々への關説は、他日を期する<sup>1)</sup>。

今、私は、問題を限定して、特に價值論との關聯に於て Ricardo と Malthus とに就いて研究の歩を進め、

1) 幸にして、『古典派の恐慌理論』に就いては、谷口教授の著書がある。改造社、經濟學全集、第14卷、『恐慌學説』参照。

マルサスが古典派の動態理論に對して、更に一般的に言つて景氣變動理論に對して、如何なる地位を占む可きかを吟味せんとするものである。

## 第二章 英國古典派の動態理論

經濟學の鼻祖 Adam Smith は、交換價値の尺度に就いても、或ひは支拂勞働説、或ひは投下勞働説を説くと言ふ風に、「非常な素樸さを以つて絶えざる矛盾の中に動いて居る。<sup>1)</sup>」斯かる動搖的價値論から出發して、スマスは更に價格・賃銀・利子等に就いてその各々の『自然的』(靜態的) 狀態の研究を行つたが、單にそのみに止らず『變動』Variation をも考察した。彼は、賃銀<sup>2)</sup>及び地代<sup>3)</sup>に遞増、利潤<sup>4)</sup>に遞減の傾向ある事を述べ、不完全なりとは言へ『趨勢變動』を問題としたが、恐慌又は景氣變動の問題は、極めて多面的なりしスマスに於いてすら、未だ經驗せざりしが故に、問題となるには至らなかつた。

### 第一節 リカードゥ (David Ricardo) の價値論と動態理論

Ricardo は、スマスの價値論の矛盾を指摘して曰ふ、「若しも勞働者の報酬が常に彼の生産したる所のものに比例するものであるならば、一貨物に投ぜられたる勞働の分量と、その貨物が購買する勞働の分量とは相等しく、而して何れも正確に他の物の〔價値〕變動を測定するであらう。併し此の兩者は相等しくない。前者は多

- 1) Karl Marx, Theorien über den Mehrwert. II. S. 2. (マルクス=エンゲルス全集、第九卷、p. 16.)
- 2) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan's Ed., p. 71. (竹内譯、pp. 222—3)
- 3) ibid., p. 247. (竹内譯、p. 569)
- 4) ibid., p. 89. (竹内譯、p. 258)

くの事情の下に於ては一つの不變の標準であつて、他の物の「價值」變動を正確に示して居るが、後者はその貨物に比較さるゝ貨物の數に應じて千變萬化するを免れない。」と。

此の様に、リカアドゥは、スミスから價值規定の誤れる一面を追放して價值の根本法則を確立する事によつて後世に偉大なる影響を及ぼした所の・勞働價值説の礎石を据えた所の・最初の學者である。

リカアドゥは述べて曰ふ、「人間の勤勞によつて増加し得ざる物を除外する限り、勞働が眞實に總ての物の價值の根源である、といふ事は、經濟學に於いて最も重要な一個の學説である。」<sup>1)</sup>「一貨物の價值は、換言せば、その貨物と交換さるゝ或る他の貨物の分量は、其の生産に必要な勞働の相對的分量に依存する。<sup>2)</sup>」「社會の初期に於ては、これ等の貨物の交換價值は、即ち一貨物の幾干量が他の貨物と交換さるべきかを決定する所の基準は殆んど全く各貨物に費されたる勞働の比較的分量に依存するのである。」<sup>3)</sup>「それ故に、「一貨物の交換價值は、その眞實價值又はそれと交換さるゝ諸貨物の眞實價值が變更するに非ざれば、變更し得ない。」と。これによつて明かなるが如く、彼は、價值と交換價值との區別を認識して居る。先づ、價值(眞實價值、絶對價值)は、投下勞働量によつて決定せられる。而してそれに基いて交換價值(相對價值)が決定せられる。従つて、交換價值の變動は、結局投下勞働の相對量に基因する事となるのである。此の様に、リカアドゥは、價值従つて又交換價值の中に含れて居る勞働の相對的分量を問題としたが、しかしその質的方面を看過して居るのは不充分であると云はざるを得ない。K. Marxの言ふが如く、「價

- 1) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, edited by Gonner. 1913 p. 9. (1 ed. 1817.); 堀經夫譯『リカアドゥ經濟原論』p. 8; 小泉信三譯『經濟學及課稅之原理』(岩波文庫) p. 10.
- 2) 原文には、『交換價值』とあるが、彼の眞意により斯く改める。
- 3) ibid., p. 7—8; 堀譯 p. 7; 小泉譯 p.
- 4) ibid., p. 5; 堀譯 p. 5; 小泉譯 p. 7.
- 5) ibid., p. 7; 堀譯 p. 7; 小泉譯 p. 9.
- 6) Letters of Ricardo to Trower. (4. July, 1821) pp. 155—6.

値の單位を構成する労働は、たゞ單に平等の・單純の・平均労働ではない。労働は特定の生産物に於て現はれる私個人の労働である。しかるに、生産物は、價值としては社會的労働の體化でなければならず、……かくて私的労働は直接にその反對物として社會的労働として現はされる、かくの如き同質の労働はその直接的反對物として抽象的一般的労働として、従つて一つの一般的等價に於て、現はれる<sup>1)</sup>。」

次に、リカアドゥに於ける價值と價格との關係を見る。「一貨物の價格は、貨幣のみで現はされたその交換價值である<sup>2)</sup>。」彼が「自然價格」と呼ぶ所のは、労働價值又は自然價值と云ふよりも寧ろその轉化したる・修正せられたるもの、即ち「生産價格」であると解せらる可きであらう<sup>3)</sup>。而して、市場價格なるものは、自然價格を中心に偶然的に且つ一時的にそれより偏倚する所の價格を意味する。それ故に、「究局に於て諸貨物の價格を左右しなければならない所のは、生産費であつて、而して屢々言はれ來りし如く、供給と需要との間の比例ではない。成る程、供給と需要との間の比例は、一貨物が需要の増加又は減少に應じてヨリ大なる又はヨリ小なる分量に於て供給さるゝに至るまで、暫時其の市場價值に影響を及ぼし得るであらう。併しこの結果はたゞ一時繼續するに過ぎないであらう<sup>4)</sup>。」斯う言ふ風に、彼は全然需要供給説を排する。しかし乍ら、彼にあつても、獨占價格が全く需要によつて決定される事、及び市場價格は短期間需要供給關係によつて決定される事を認めて居るのである。けれども、彼の理論の構想に於いては、全く自由競争と利己心とが支配して居るが故に、それは「自由價格」である。假令それが一時

- 1) K. Marx, Theorien über den Mehrwert. III. Bd. S. 160—1. マ・エ全集第十一卷、p. 167.
- 2) D. Ricardo, Proposals for an Economical and Secure Currency. (Ricardo's Economic Essays, edited by Gonner. 1923) p. 162.
- 3) Ricardo, Principles, pp. 68—9. 堀譯 p. 90—1. 小泉譯 p. 71—73. Cf. 堀經夫『リカアドゥの價值論及び其の批判史』; 森耕二郎『リカアドの價值論研究』
- 4) Ricardo, Principles, p. 373; 堀譯 p. 417; 小泉譯 p. 378.

的に自然價格から離れても絶えず均衡に向ふものであつて、結局に於いてその市場價格は自然價格に復歸し兩者は一致すると言ふ風に考へられて居るのである。此の様に、リカードは、投下労働價值説に據つて主として『均衡』（靜態）理論を研究したので、McCracken の如きは彼を呼んで『均衡經濟學の先驅者』となす<sup>1)</sup>。

斯くの如きリカードの價值論は、實は彼の目的とする分配論の理論的基礎をなすものである。彼の分配論は、地代論の正しき理解の上に立つて、(1)利潤と賃銀との間の靜態的比率關係、(2)兩者の間の動態的變化、即ち「富の増進が利潤及び賃銀に及ぼす結果<sup>2)</sup>」を研究するにあつた。(1)に就いては、兩者は一物の二分であるから、一が大となれば他は小となる。即ち、「利潤は賃銀の高低に比例して低いか高いかであらう。」<sup>3)</sup>(2)に就いては、彼はスミスと同様な變動傾向即ち趨勢變動を認めるに過ぎない。けれども、その原因に就いてはスミスと異なる點をもつ。先づ、「労働の自然價格は、労働者及び彼の家族を維持するに要求さるゝ食物、必需品、及び便宜品の價格如何に依る。……〔然るに〕それによつて其の自然價格が左右さるゝ所の、主なる貨物の一つ〔食物〕が、それを生産する事の益々困難となる結果として、益々騰貴する傾向をもつて居るから、労働の自然價格は、社會の進歩と共に、常に騰貴する傾向をもつて居る。」<sup>4)</sup>此の様に賃銀が遞増の傾向にある限り、その對立物たる「利潤の自然的傾向は下落にある。」<sup>5)</sup>

然るに、斯かる變動傾向が極限まで進行して、「賃銀が農業家〔資本家〕の全所得額に等しくなるや否や、蓄積は終りを告げなければならぬ。」<sup>6)</sup>此の時、「如何なる資本も何等の利潤を生む事が出來ず、而して何等の

- 1) McCracken, Value Theory and Business Cycles. p. 13.
- 2) Ricardo, Principles. p. 1; 堀譯 p. 1; 小泉譯 p. 3.
- 3) ibid., p. 87—8; 堀譯 p. 110; 小泉譯 p. 91.
- 4) ibid., p. 70; 堀譯 p. 92; 小泉譯 p. 74.
- 5) ibid., p. 98; 堀譯 p. 122; 小泉譯 p. 103.
- 6) ibid., p. 99; 堀譯 p. 123; 小泉譯 p. 104.

附加的労働も需要され得ず、而してその結果として、人口は其の最頂點に達してゐるであらう。<sup>1)</sup>これこそは、正に、極限的理想の静止状態であり、此の状態に達するまでの利潤率の遞減は、その程度に應じて、常に資本蓄積従つて又生産擴張にとつての制限となる。けれども、「資本がいくらかの利潤でも生んで居る間は、資本の使用に全然限度がない。」<sup>2)</sup>而して、生産されたものは必ず消費される。「需要はたゞ生産によつて制限されるに過ぎず、<sup>3)</sup>」「有効需要は生産に依存する」<sup>4)</sup>から、商品の流通は需要と供給との必然的適合を意味する。「生産物は、常に生産物によつて或は勤勞によつて購買される。貨幣はそれによつて交換が行はるゝ所のその媒介物に過ぎない。」<sup>5)</sup>従つて、こゝでは、貨幣經濟も信用經濟も、結局に於いては、物々交換に歸着する。リカアドウにあつては、「交換價值と使用價值との對立を含む商品が、單に生産物（使用價值）に轉化され、従つて諸商品の交換は、生産物の單なる使用價值の單なる交易に轉化されてゐる。それは、資本主義的生産以前に逆戻りするのみでなく、單純な商品生産以前にさへ逆戻りして、そして資本主義的生産の最も錯綜した諸現象——世界市場恐慌——は、資本主義的生産の第一條件即ち生産物が商品であり従つて貨幣として自己を表現しそして轉形の過程を通過しなければならぬ事が否定される事によつて、否定されて居るのである。」<sup>6)</sup>

此の様に、生産は消費であり、物々交換が行はれる以上、リカアドウの論理的歸結として一般的過剰生産の發生する餘地のない事は、明かである。

併し乍ら、彼と雖も一時的不調和又は部分的恐慌を考へる事が出来る。だが、それは或る貨物の一時的不足

1) *ibid.*, p. 99; 堀譯 p. 123; 小泉譯 p. 104.

2) *ibid.*, p. 280; 堀譯 p. 320; 小泉譯 p. 289.

3) *Letters of Ricardo to Trower.* p. 128.

4) *Letters of Ricardo to McCulloch.* p. 79.

5) *Ricardo, Principles.* p. 275; 堀譯 p. 315; 小泉譯 p. 285.

6) *Marx, Mehrwert.* II. 2. S. 275; マ・エ全集第十卷 p. 293.



であつて、決して一般的過剰生産ではない。先づ第一に、欲望に對する生産者の見込違ひの結果として或る貨物の供給過剰が起るかも知れぬが、「それは、誤算によるものであつて、生産物に對する需要の缺乏によるものではない」<sup>1)</sup>のであるから、結局調和をとり戻すものである。第二に、戦争その他の原因は、一般に産業に著しい困難を齎らし、多くの固定資本は休眠し、労働者は失職し、諸國間の通商は阻害され、こゝに部分的恐慌が発生する。けれども、「斯かる困難が、戦争から平和への變化と直接に關聯せる場合には、……労働維持のため基金が著しく減損されたのではなくて、むしろ其の平常の方向より他に轉ぜしめられたのであつて、一時苦しむたる後は、國民は再び繁榮に向ふであらう。」<sup>2)</sup>それ故に、斯かる困難は、「一時的災難又は偶然事故」<sup>3)</sup>ではあるが、決して「不景氣」Stagnation<sup>4)</sup>ではないと言ふ事になる。

前述せる所によつて、リカードの動態理論に就いての概要を觀る事が出來た。その結果、吾々の知り得た事は、理論經濟學の礎石となる様な最も基本的な範疇に就いて過度の單純化(Over-simplification)をなしたと言はれる程嚴密なる靜態的研究に没頭せるリカードに在つては、その論理的展開によつて「趨勢變動」Trendの研究を齎らしたが、たゞそれ丈けに止り「景氣變動」研究の端初形態たる「滯貨問題」又は「恐慌問題」に就いては何等積極的立言をなすに至らず、寧ろ論理的ならんがためには、現實にリカードの經驗した最初の恐慌(一七九三年)に於いてすら既に商工業及び金融業の各部門に亘つて可成り一般化して居たにも拘らず、此の儼然たる一般的過剰生産の事實をさへ否定せざるを得ないデレンマに陥つたのである。それ故に、McC

- 1) Ricardo, Notes on Malthus. edited by Hollander and Gregory. 1928. p. 78—9.
- 2) Ricardo, Principles. p. 250; 堀譯 p. 285; 小泉譯 p. 260.
- 3) ibid., p. 248; 堀譯 p. 283; 小泉譯 p. 258.
- 4) Letters of Ricardo to Malthus. p. 189.
- 5) McCracken. op. cit., p. 135.

Cracken は次の様に述べる。「投下労働價值説を礎石とせるリカードの經濟學體系は、……均衡及び趨勢變動の論理的説明を提供する。「しかし」不均衡及び景氣循環を説明せんとする汎ゆる試みは、經濟學的矛盾又は論理的撞着の例證を包含する。」<sup>1)</sup>

## 第二節 マルサス (Thomas Robert Malthus)

### の價值論と動態理論

マルサスは、その名著「人口論」によつて餘りにも輝かしい名聲を勝ち得た。「汎ゆる國民に於いて、最も多數を占むる所の社會の下層階級の幸福」<sup>2)</sup>を考へる彼は、「人口は常に生活資料の水準に引下げられねばならぬ」<sup>3)</sup>と云ふ人口法則を樹立した。人口が生活資料以上に出た時は人口過剰なる逆行的暗黒時代であり、之に反して生活資料が人口を超過する時は食糧豊富なる順行的光明時代である。従つて、人類多數の幸福に影響するものは生活資料であり、之を契機として人口論と經濟學とは接觸する事となる。従つて、「人口論」第一版以來、彼の關心は「生活資料」を中心とする經濟學的研究にあり、初期に於いては重農的傾向をとつたが、後期には農工商併立主義に轉向し、又穀物法・農業法・地代論に關する研究をも發表し、絶えず經濟社會の變動に着目して居たのであるから、その當時に發生せる「恐慌」に對しても亦想到するに至つた事は云ふまでもない。斯様にして、彼の經濟理論は、事實の發展と共に輝かしい果實を結ぶに至つた。それにも拘らず、彼の經

1) *ibid.*, p. 210.

2) Malthus, *An Essay on the Principle of Population*. First Edition. 1798. p. 303.

3) *ibid.*, Preface. p. iii.

濟理論は人口論の光にかくされて一般に後世の人に顧みられる事が餘りにも尠かつた。その中に在つて、Bonarは「一般理論に對する彼〔マルサス〕の貢獻はリカアドウのそれに等しい<sup>1)</sup>」と謂ひ、彼と共にLeserはマルサスを地代理論の最初の發見者なりと稱揚し、Anonはマルサスの價值論を極度に稱揚して居るのを見出す。又、最近、McCrackenは、マルサスをば「景氣循環論のバイオニア<sup>4)</sup>」の地位に置き、「マルサス派經濟學復興の時機が熟して居る<sup>5)</sup>」とさへ主張して居る。

扱て、私は、こゝで、彼マルサスの動態理論をば彼の價值論と關聯させて問題とする事によつて、果してそれがMcCrackenの強調する程賞讃に値するか否かを吟味してみようと思ふ。

マルサスの經濟學は、富の性質に關する靜態的研究(均衡理論)と、富の増進の原因に關する動態的研究(變動理論)とから成る。前者は第一版では第一章から第六章までを占め、後者は第七章を占めて居たが、一八三六年の第二版では第一編第二編と云ふ風に對立的に置かれる様に改訂された。これ正しく、人口論に於いて人口増加の諸條件を研究せると同じく、經濟學に於いては富の増進を條件付ける諸要素を研究する事によつて、「彼の努力が、人間社會の生活をその發展に於いて把握し、この發展を若干の主要原因の協力から説明せんとするにあつた<sup>6)</sup>」事を物語るものである。

彼にあつても、その動態理論の研究は、正當にも、靜態理論の研究から發足する。

彼の「富」概念は、分量と價值との二重性をもつ。「一國の富は、一方その國の勞働によつて得ら

- 1) J. Bonar, Ricardo and his Works. (1 ed. 1885; 2 ed. 1924) Preface; 堀經夫・吉田秀夫共譯『マルサスと彼の業績』序言 p. 10.
- 2) Emanuel Leser, Untersuchungen zur Geschichte der Nationalökonomie. 1881; 高橋次郎『地代理論の歴史に於けるマルサスの地位』(『商學討究』第二卷下冊)
- 3) アモン著『正統派經濟學』(社會科學叢書25編)
- 4) McCracken. op. cit., p. 13.
- 5) ibid., p. 136.
- 6) E. Bergmann, Geschichte d. nationalökonomischen Krisentheorien. 1895. S. 138.

れる生産物の分量に依存し、他方此の分量の・現存人口の欲望及び資力に對する適合——それによつて生産物に價値を與へると考へられる様な適合に依存する。此の兩者の一つだけによつて價値が決定されるものではないと云ふ事より確實な事は一つもあり得ない。<sup>1)</sup>「富と價値とは、常に必ずしも同一でない事は確かであるが、しかし兩者は極めて密接な關係に於いて現はれる。それ故に、「富の評価をなすに際しては、價値に關係なく分量を考へる事は、分量に關係なく價値を考へると同様に、重大な誤謬である。」<sup>2)</sup>

マルサスはリカアドウの價値論を批判して、次の如く言つて居る。「リカアドウ君は、たゞに、彼が商品の價値と名付ける所のものが、その中に實現されてゐる労働の分量によつて決定されると主張するに止らず、更に進んで、事實上次の様な命題を提起する、曰く、商品は相互にその中に實現されてゐる労働の分量によつて交換される……と。……しかし、此の命題は、普通の經驗とは相容れない。自然的な、且つ通常の經路からの一時的離反に對して汎ゆる必要な斟酌を加へても、尙ほ斯かる交換の法則に従ふ商品の部類は極めて局限されて居り、そして反對に、それに従はない部類は却つて商品の大部分を包含すると云ふ事は、一見明瞭である。……若しも吾々が彼の例外に屬する部類を點檢するならば、換言すれば、使用された固定資本の分量及び耐久性に差異があり、又使用された流動資本の回歸期間が一樣でない様な部類を點檢するならば、吾々はそれが多數に上り、寧ろ原則が例外として、又例外が原則として考へらるべきものだ」と云ふ事を發見するであらう。<sup>3)</sup>」即ち、生産價格が價値から乖離する過程を理解する事のなかつたりカアドウが、自己の價値法則を貫く

1) Malthus, Principles. 2nd Edition. p. 301; 1st Edition, p. 340 (1、最後の一句を缺く。

2) ibid., 1st ed., p. 344.

3) Malthus, Definitions of Political Economy. 1827. pp. 26—7.

ために、誤つて例外をば原則とせざるを得ない矛盾に陥つた事を難じてゐるのは、マルサスの一大功績と云ふべきである。

然らば、マルサスの價值論は如何？ 彼に於ける「價值」は常に「交換價值」を意味する。従つて、彼は價值決定の原因と云ふ根本問題を深く問題とする事なく、たゞ交換現象の表面的説明に従事して「一商品が支配し得る労働は、その價值の尺度である<sup>1)</sup>」と云ふ風に、價值尺度としての「支配労働價值説」を説く。「一商品によつて通常支配される所の労働は、丁度その商品の生産に實際に注ぎ込まれた労働と附加された利潤とを表はすものであるから、労働を價值尺度として見る事は正當である。斯くて、一商品の通常の價值はその供給の自然的なそして必要な條件によつて決定されると考へられるならば、商品が通常支配するであらう所の労働のみが、獨りこれらの商品の尺度であると云ふ事は間違ひない。」「労働及び利潤にのみ分解する所の商品の交換價值は、正確に、實際に此の商品の生産に注ぎ込まれた蓄積労働並びに直接労働に、總前拂に對する不定の利潤額を労働に見積つた額を加へた和から成る所の労働量によつて測定される。けれども、此の労働量は必然に商品が支配し得る所の労働量と同一量である。」<sup>3)</sup>これが、マルサス價值論の根柢である。

此の様に、マルサスは利潤を取入れる事によつて、リカアドウの難破した暗礁から離脱せんとした。「彼は、此の『利潤』を、リカアドウにない不等の交換と云ふ過程から引き出さうとして、實は豫めこれを商品の價值の中に潜ましめたのである。それ故に、彼は、その問題の力點を、資本と賃労働との間の不等の交換と云ふ過

- 1) Malthus, Measure of Value. 1823. p. 61.
- 2) Malthus, Definitions. p. 214.
- 3) Malthus, Measure of Value. p. 15—6.

程にもつて行つた事は確かであり、そしてたゞ力點をそこに置いたと云ふ事が彼の「功績」だと云へるのである。しかし、それ故に、彼はそこで問題を解決したかと云へば、決してさうではない。<sup>1)</sup> マルサスによると、商品の價値は、それ自身の價値プラス價値に對する餘剩に等しいと云ふ事になる。だが、これは、商品と生ける勞働とが交換される時のみに限られる。商品が商品として他の商品と交換される時には、此の様な事は起らないのであるから、此の點ではマルサスも誤謬に陥つて居る。彼は、商品交換の領域に於いて、事實上不等の交換が行はれると云ふ事、即ち商品がその中に含まれて居る勞働よりもヨリ多量の勞働量と交換されると云ふ事を述べて居る事になる。此の場合、買手がまた資本家即ち商品の賣手であるとすると、買手と賣手とは價値以上に彼等の商品を賣り、そして相互に欺瞞し合ふ事になる。しかも、若しも兩者が一般的利潤だけを實現する時には、相互に同程度に欺瞞し合ふ事になる。従つて、資本家は、彼等の商品を相互に交換する事によつて利潤を實現する事は出来ない事になる。そこで、資本家は、出来るだけ小さい部分を勞働者に賣り戻し、出来るだけ大くの部分を同時に賣手となる事のない不生産的消費者階級に賣り込む事によつて、利潤を實現する様にする。

斯くの如く、マルサスによると、交換價値は交易に於ける一物の一或は數多の物に對する關係であり、此の交換價値を貨幣で表現したものが價格に外ならないのであるから、「價値」も「交換價値」も又「價格」も結局は同一概念を示すことになるのである。

1) 森戸・笠共著『剩餘價値學說略史』（經濟學全集第五十卷）p. 387.

交換社會に於いて、「商品の價格は、それに對する供給と對比せる所の・それに對する相對的需要によつて決定される。而して、此の法則は、極めて一般的なものとして現はれるから、如何なる價格變動と雖も、需要又は供給状態に於ける先行變動にまで充分遡ぼり得ないものは恐らく一つもあるまい。」<sup>1)</sup>「價格が需要又は供給によつて決定されると云ふ時には、それは價格が需要のみによつて、又は供給のみによつて決定される事を意味するのではなくして、兩者相互の關係によつて決定される事を意味する。」<sup>2)</sup>

需要又は供給は、消費又は生産と同義語である。こゝに云ふ供給とは「賣却せんとする意向と結合せられたる商品の生産」<sup>3)</sup>を意味する。而して、需要とは、「購買力と結合せる欲望」<sup>4)</sup>即ち「有效需要」を意味するが、その中に於いても特に「需要の強度」Intensity of Demand<sup>5)</sup>に決定的重點が置かれて居る。特定の貨物に關して購買の意思及び資力がヨリ多く存在すればする程、それに對する需要はヨリ大きく、ヨリ多くの強度をもつ事となる。斯かる需要に對して何等の顧慮を拂ふ事なく供給を増大させる事は、必然的に經濟的混亂を招く事となる。それ故に、生産と消費との間には適當の比例が存在しなければならないのであるが、實際にはそれは個人の自利心、自由放任、又は無計劃的生産から自動的に發生しないのである。此の點に就いての研究は、當然彼の『經濟原論』『第二編』に於ける動態理論へと導く。

次に、此の需要供給説と生産費説との關係如何と云ふに、之に對してマルサスは次の様に述べて居る。「多くの點に於いて必然的に互ひに相ふれては居るが、併しそれ等の説は本質的に全然違つた起源を有するもので

- 1) Malthus, Principles, 2 ed., p. 62; Cf. 1 ed., p. 64. 若干表現が異なる。
- 2) ibid., 2 ed., p. 62; 1 ed., p. 65.
- 3) Malthus, Principles. 1 ed. p. 64.
- 4) do., Principles. 1 ed., p. 66.
- 5) ibid., p. 66.

あるから、従つて甚だ注意深く區別さるゝを要する。<sup>1)</sup>「獨占財、粗生々産物及び紙幣の價値は、全然需要供給によつて決定される。工産物の價値は生産費の影響もうけるが、しかも尙ほ結局は需要供給關係を通じて決定されるものである。故に、需要供給こそ、價値及び價格の普遍的原理である。尙ほ、彼にあつては、需要供給によつて定まる價格が生産費と一致する時には、之を「必要價格」と呼び、これに「市場價格」を對立させる。「自然價格及び必要價格は、市場價格と同様に、此の原理〔需要供給説〕によつて規制されて居る様に見える。そして、唯一の相違は、前者が需要の供給に對する普通の平均的關係によつて規制されてゐるのに、後者が前者と異なる時には、それは需要に對する供給の異常なる偶然的關係に依存すると云ふ事である。<sup>2)</sup>」

此の「商品の市場價格は、富の生産に於いて、汎ゆる社會の大なる變動の直接の原因である。そして、これらの市場價格は（貨幣の勞働に對する關係が知られて居る時には）、常に明かに疑もなく、それが交換せられる時及び處に於いて固有の原因から生ずる商品の交換價値を表はし、特殊の商品に就いて言ふと需要供給の實際の狀態がその普通の平均的狀態とは異なるが故に、それらの市場價格は自然價格及び必要價格と異なるのみである。<sup>3)</sup>」

此くの如き需要供給説の上に、マルサスは、その經濟理論の展開を行ひ、地代・賃銀・利潤の研究をなして居るが、そこに流れてゐる需要供給説的觀念は、既に彼の「人口論」第一版以來のものであると言へる。そこには次の如き記述がある。即ち、「吾人は、或る一國の生活資料は、丁度その國の人口を支へて行くに足るだけ

1) *ibid.*, 1 ed. p. 71.

2) *ibid.*, 2 ed. p. 78; 1 ed. p. 84-5.

3) *ibid.*, 2 ed., p. 303.



あると想像しよう。先に最も墮落した社會にも存すると考へた人口を増加させる不斷の努力は、この場合にも、それを養ふに足る生活資料の増加しない中に、此の國の住民の數を増加させるに相違ない。……貧者は前よりも悪い生活をし、その多數は非常なる窘窮に悩まなければならぬ事になる。労働者の數は、市場に於ける所要労働量に比しては多過ぎる事になつたのであるから、自然、勞力の價格が下り、一方に於ては食料品の價格が上り始める。従て労働者は前と同じだけ儲けるためには前よりも餘計に働かねばならぬ。この様な窘窮の時季には結婚は困難であり家族を扶育する事が出来ないから、ために人口の増加は停滯する。一方勞力の安價、労働者の豊富、そのために必ず起る彼等の勉強の増加は相合して、暫くにして農耕者をして、耕地にもつと肥料を施し、もつと充分に改良を爲さしめる事になり、それを續けて行くと、遂には生活の資料が人口に對して吾人の最初に出發した時期に於けると同じ様な比例になる。こうなれば、労働者の地位は、復可成り良くなるから人口に對する抑制は或る程度まで弛められ、而して幸福に關する前と同じ逆轉進轉兩面の運動が繰り返へされると云ふ事になる<sup>1)</sup>。此の「振動」Oscillation 的思考は、正しく需要供給説的觀念を表明せるものであり、靜止狀態の研究のみならず、變動又は動態への志向を明かに示すものである。彼の有名なる「人口は、制限せられなければ、幾何級數的に増加する。生活資料は算術級數的にしか増加しない<sup>2)</sup>」と云ふ人口論は、既に一七九八年に於いて明かに動態的研究への志向を示す。而して、一八一五年の「地代の性質及び増進に關する研究」に於いても、靜態的研究の上に動態的研究を發展させて居るのを見る<sup>3)</sup>。斯様にして、その最初の研究

- 1) Malthus, Principle of Population. 1 ed., pp. 29—31. 高野・大内共譯『人口の原理』pp. 29—30.
- 2) ibid., p. 14; 譯本 p. 14.
- 3) 高橋次郎『地代理論の歴史に於けるマルサスの地位』(商學討究、第二卷下冊) p. 379. f.

から存在して居た動態的觀察は、「經濟原論」の中に於いて更に大なる發展を齎らした。

マルサスがその動態理論を展開して居る第二編は、「富の増進」を取扱ふ。道德・政治・法律・宗教的原因等は富の増進に影響するが、それよりも更に直接的な更に近接せる原因即ち「經濟學の領域内」にある原因をば、こゝで正しく問題として居るのである。

先づ問題となるのは、人口が富増進の直接的原因なりや否やである。之に對して、マルサスは次の如く否定的結論を下す。「人口の増加は、勞働追加量の必要な場合には、仕事の不足のために、また仕事に従事する者の支持の不足のために、間もなく増加を妨げらるべく、従つて生産力に比例する富の増進に對して、必要な刺戟を提供しないであらう。」<sup>2)</sup> 即ち、資本家によつて需要される人口増加のみが有效需要を創り出すが故に、富の増進のための原因とはなり得るが、しかし單なる人口數の増加は之に貢獻するものではない、のである。

斯様に富増進の直接的原因としての人口を否定せるマルサスは、次に進んで生産の三大原因、即ち資本の蓄積、土地の豊饒、及び技術の進歩に就いて論ずる。第一に、土地の豊饒は、生産力の重要な一要素であり、富の増産のための可能の一條件をなすものではあるが、しかしそれが現實に富の増進を齎らすには資本を必要とし、更に之を永續的ならしむるためには需要が必要であるから、單なる豊饒そのものは富の増進の直接的原因とはなり得ない。換言すると、「一般に、土地の豊饒それだけでは、富の永續的増進に對する適當な刺戟とはならない。」<sup>3)</sup> 第二に、技術の進歩、即ち「勞働を節約する諸發明」は、土地の豊饒とその性質を異にして、

1) Malthus, Principles of Pol. Economy. 1 ed., Summary. p. 568.

2) ibid., 1 ed., pp. 349—50; 2 ed., p. 313.

3) ibid., 1 ed., p. 401; 2 ed., p. 351.

自然的にはなく人為的に經濟社會に持ち込まれるものではある。しかしそれにも拘らず、兩者共に富の生産を容易ならしめるが、それに對して適當なる市場擴張を伴ふに非ざれば之を充分に利用し得ないと云ふ同一法則の適用をうける事に於いては變りがない<sup>1)</sup>。要するに、技術の進歩も、土地の豊饒も、それが實現に生産力として活動するためには、資本を必要とするものである。所で、第三に、資本の蓄積に就いて見ると、これこそは誠に富の増進を直接に刺戟する原因として最も重要なものであり、「富の永久的且つ永續的増進は、資本の永續的増加なくしては起り得ない事は、確かに眞理である<sup>2)</sup>」資本の蓄積とは、「資本を追加するための収入からの節約<sup>3)</sup>」であり、企業家の生産擴張である。生産擴張を行ふ場合には、労働者は不生産的階級から生産的階級に轉化するが故に、生産物は著しく増加する事となるが、しかし彼等の消費はそれによつて増減する事はない。然るに、資本家は収入を節約して資本に追加するのであるから、その消費は減少する事となる。さうしてみると、資本家も労働者も結局彼等自身で消費し盡し得ない生産物を産出する事になる。「かゝる事情の下に於いて、私は敢えて問ふ、増加したる生産的労働者によつて得られた商品の増加量は、其の價値をばその生産費以下に低下させる程の價格下落なしに、又は少くとも節約せんとする意思及び資力の兩者を極めて大きく減少させる事なしに、如何にして、その購買者を發見し得るか、と<sup>4)</sup>」即ち、「節約の原則は、極端に進めば、生産の動機を滅失させる<sup>5)</sup>」事となり、資本蓄積過程の進歩は此處に極限に達してそれ自身と矛盾するに至る。單なる資本蓄積は、斯様にして、マルサスに據ると、一般的過剰生産に導くの傾向を有する事となるのである。

- 1) *ibid.*, 1 ed., p. 412—3; 2 ed., p. 360.
- 2) *ibid.*, 1 ed., p. 351; 2 ed., p. 314.
- 3) *ibid.*, 1 ed., Summary. p. 570.
- 4) *ibid.*, 1 ed., p. 353; 2 ed., p. 315.
- 5) *ibid.*, 1 ed., p. 8; 2 ed., p. 8.

今まで、吾々は、専ら生産の方面に於けるマルサスの説を跡付けて來たのであるが、しかし彼にあつては富の分量の増加は必ずしも價値の増加を意味しない事は既述の如くである。富の増進は二方面から考慮されなければならず、分量の増加は生産に依存するが、價値の増加は分配に依存する。それ故に、彼は生産と分配との「適當なる割合」*due proportion* に就いて述べて謂ふ、「生産物の分量の増加は、主として生産力に依存し、生産物の價値の増加は主としてその分配に依存する。生産と分配とは、富の二大要素である。この二つが適當な割合に結合されれば、甚しく長き期間を要せずして、地球上の富と人口をばその可能なる資源の極限にまで運ぶことが出来る。」<sup>1)</sup>と。こゝに「生産力」と言ふのは物的及び人的の生産資源を意味し、「分配」とは此等の階級間への分配ではなくして、生産物の消費者への分配であるから、それは正しく表現するならば「消費」に該當するものである。彼も亦、時には分配と言はずに消費と言つて居る。即ち、「若しも消費が生産を超過するならば、その國の資本は減少しなければならぬ。そして、その國の富は、その生産力の缺乏のために、次第に減殺せねばならぬ。又若しも大なる程度に生産が消費を超過するならば、消費せんとする意思の缺乏のために、蓄積及び生産の動機はなくなつてしまふ。兩極端は明白となる。そこには中和點がなければならぬ。」<sup>2)</sup>又、「消費せらるべき物と消費者の數・欲望及び資力との間に、換言すれば商品の供給とその需要との間に、適當な比例が保たれねばならぬ。」<sup>3)</sup>と。此の様にしてみると、彼の言ふ「生産と分配との均衡」は、實は正確に云ふと「生産と消費との均衡」又は「需要と供給との均衡」であらねばならぬ。

1) *ibid.*, p. 426; 2 ed., p. 371.

2) *ibid.*, 1 ed., p. 9; 2 ed., p. 7.

3) *ibid.*, 1 ed., p. 419; 2 ed., p. 365.

扱て、前述の富の生産分量増大の三原因は、——即ちそれらのものも結局は資本の蓄積に歸着する事となるのであるが、——唯それだけで富の分量の増大を來すものではあるが、その無限なる發展は結局過剰生産——恐慌への途を辿る事となる。かゝる生産過剰を來す事なく、生産と消費とが均衡を保つて富の永續的増進を確保するためには、生産力と消費力との結合を必要とする。即ち、單に生産の分量に關する限り、富の増進は前述の三原因の増進に比例して進行する傾向を有するが、此の事をして永續的に可能ならしむるためには、富の分量と相併んでその價値の増進が必要であり、それを確保する原因として消費（マルサスは時には分配と謂つてゐる）に關する三大原因が作用する事が必須である。

マルサスに従ふと、消費（彼は分配と云ふ）に依存する所の・價値の増加にとつて最も有利な原因は、第一土地財産の分割、第二内外の商業、第三不生産的消費者の維持、これである。第一の土地財産の分割に就いて見ると、「富の増進は、比較的少數の富める財産家を以つてしては有効需要の缺乏のために妨害せられ、小財産家の過多を以つてしては、……供給力の缺如のために妨害される。」<sup>1)</sup>かくの如くにして、「經濟學に關する凡ての大なる結論は、富に關しては、比例に依存する」<sup>2)</sup>ものであり、土地財産の適當なる中庸を得たる分割は、富の消費に對する一大手段であり、その價値を維持増進させるの傾向をもつのであるが、その進行にも一定の限度があつて、遂にはそれが生産力と衝突し始めるに至る。<sup>3)</sup>これは、主として商業の擴張によつて取除かれる。第二に、内國商業も外國貿易も共に商品の價値を高め利潤を高める事によつて、<sup>4)</sup>生産を刺戟するのであるか

- 1) *ibid.*, 1 ed. p. 432; 2 ed. pp. 375—6.
- 2) *ibid.*, 1 ed. p. 432; 2 ed. p. 376.
- 3) *ibid.*, 1 ed. p. 439; 2 ed. p. 382.
- 4) *ibid.*, 1 ed. p. 582. この點では、Ricardo と對立する。

ら、「外國貿易並びに凡ての市場の擴張は、消費（原文では分配となつて居る）より起る價值増加にとつて、極めて有利であると考へねばならぬ<sup>1)</sup>。」

第三に、而して三原因中最も重要な原因は、不生産的消費の必要と云ふ事である。これは、恰も、前述の生産増大の三原因中に於ける資本蓄積の如く卓越せる存在價值を消費増大の三原因中に於いて有してゐる。商人が彼等の業務を引續き繼續してその利潤の實現をはかるためには、不生産的消費階級がそこに重要な役割を演ずるのである。「普通の社會状態の下に於いては、親方製作家及び資本家は、収入の形態に於いて必要の程度まで消費せんとする能力はあるが、その意思を有しないであらう。彼等の労働者に就いて見ると、假令彼等がその意思があつても、その能力をもつて居ないと考へなければならぬ<sup>2)</sup>。」是等の「生産的階級」の外に、「地主階級」がある。しかし、「生産的労働者の生産物の適當なる消費をしようと思はない地主は、恐らくは多數の僕婢を使用するであらう<sup>3)</sup>。」これこそは、斯かる事態の下に於いて、地主のなし得る最良の事であり、仕事の缺乏から労働者の失職するのを妨ぐ唯一の方法である。そこで、「不生産的階級」の消費が問題となる。先に問題とした生産階級（資本家及び労働者）と地主階級との消費だけでは増大せる生産物を消費し盡す事が困難であり、その限りに於いては過剰生産の可能性が在る事となるから、そこで別に不生産的階級の存在が、政治的意味に於いてのみならず、又經濟的意味に於いても必要とせられる事となる。マルサスによると、不生産的消費者は、二つの範疇に分れる。一は、僕婢・自由職業者の如く、個人の私的支拂を受ける階級であり、

1) *ibid.*, 1 ed. Summary, p. 585.

2) *ibid.*, 2 ed., p. 404.

3) *ibid.*, 1 ed., p. 487.

これは需要を喚起して産業を刺戟するに最も有益であるのみならず、生産費を高めるの弊を伴はない<sup>1)</sup>。他は、軍人・官公吏の如く、國家の租税から公的支拂をうける階級であり、これも亦生産を刺戟するには違ひないが、しかし彼等の消費の源泉たる租税そのものは工業に對しては生産費を高め、商業に對しては自由なる活動を妨ぐる點に於いて、富の増進を阻害する事となる<sup>2)</sup>。斯くの如く、孰れの範疇たるを問はず、不生産的消費の存在若しくは増加を考ふる限り、生産過剰はその實現性を奪はれる事となる。けれども、彼等の存在はそれだけ富の消耗を意味するから、その餘りにも過大なる存在は又却つて富の増進を阻害する事となる。こゝに於いて問題は、生産的階級と不生産的階級との割合如何と云ふ事になるが、前者が多過ぎれば生産物の價値は供給過多のために低下し、後者が多過ぎれば市場に在る生産物量の比較的少ないためにその價値は減少するに至る。それ故に、「富を刺戟するための不生産的消費者の特別なる用途は、國民的産業の生産物に對して最大の交換價値を與へる様なバランスを生産物と消費との間に維持するにある<sup>3)</sup>。」併し乍ら、兩者の間に一定の中庸を得た割合を決定する事は、經濟學のなし得ざる所であり、具體的なる自然的及び人的の生産力の大小に依存するものと云はなければならぬ<sup>4)</sup>。

斯様してみると、マルサスにあつては、「富の恒久的増進は、たゞ商品に對する需要の永續的増進によつてのみ維持され<sup>5)</sup>」需要が供給に伴はなければ其處に一般的過剰生産の發生する可能性が在る事になる。それ故にこそ、不生産的階級の存在理由が與へられる事になる。即ち、「生産消費の均衡攪亂より發生する害惡を

- 1) *ibid.*, 1 ed., p. 479; 2 ed., p. 408—9.
- 2) *ibid.*, 1 ed., p. 480; 2 ed., p. 409—10.
- 3) *ibid.*, 1 ed. p. 489; 2 ed., pp. 412—3.
- 4) *ibid.*, 1 ed. pp. 489—90; 2 ed. p. 413.
- 5) *ibid.*, 1 ed. p. 413.

救済する上に於いて、最も吾々の能力範囲にあり、そして最も直接に與へられてゐる對策は、道路その他の公共事業に貧民を使用する事<sup>1)</sup>、地主及び有産者の間に於ける土地を建設し美化し、又職人や僕婢を雇傭せんとする傾向、この二つである。<sup>2)</sup>此の様に、マルクスの謂ふが如く、「マルサスの結論は、彼の價値に就いての根本理論から正當に引出されて居るのである。」<sup>3)</sup>その上に、マルサスは、現實の社會に於いて既に生産過剰又は需要減退に基く一八一五年の恐慌を見、それに對して彼の經濟動態の法則を適用して論じてゐるのである。<sup>4)</sup>

マルサスは、斯様に、單に一般的傾向としての趨勢的變動の過程のみならず、更に恐慌の形態をとつて現はれる短期の周期的景氣變動の過程をも研究してゐるのである。彼にあつては、現實の社會の變動過程に於いて、或る條件の下に於いては、生産と消費との矛盾、又は需要と供給との喰ひ違ひ、即ち生産に對する有效需要の過少、資本蓄積による生産過剰が、一定の程度以上に達した時には、生産は行き詰りを來し、一般的過剰生産が発生して恐慌を現象するの**可能性**がある事を認めて居る。けれども、彼は恐慌の**必然性**を認識するところには至らず、又恐慌から打ち續く不景氣期に於いて生産が刺戟せられて景氣上昇を齎らし、それが又不景氣から恐慌の爆發へと移ると言ふ風に、景氣の諸段階が交替して循環的に發現する姿態に於いて景氣變動と云ふ過程を取扱ふ事なく、單にその最も劇しい一段階として人々の眼を惹かずには置かない恐慌現象に寓目して、之を經濟學の問題として研究したに過ぎなかつた。これは、その當時に於ける景氣現象が明かなる交替性を以つて循環するに至つて居なかつた事に對應するものであり、これ以上の事をその時代の人に期待する事

- 1) 恐慌對策として公共事業を起す事は、今日の社會に於いても盛んに行はれてゐる事である。吾々の知る限りに於いて、文献的に於ける考を最初に發表せるものは、Malthus である。Cf. McCracken, op. cit., p. 124. note.
- 2) Malthus, Principles, 1 ed. p. 512; 2 ed. p. 430.
- 3) Marx, Mehrwert. III. S. 49; マ・エ全集第十一卷、p. 64.
- 4) Malthus, Principles. 1 ed. pp. 490. f; 2 ed. pp. 413 f.



は、實際が理論に先行するのを否定し去る事になつて了ふであらう。

### 第三章 マルサス動態理論の評價

前章に於いて、吾々は、リカードゥ及びマルサスの動態理論に一瞥を與へる事によつて、そこに『經濟的變動』に於いて互ひに絡み合ふ二筋の絲——即ち『趨勢變動』と『景氣變動』に就いての研究の萌芽を發見する事が出来た。換言すると、前者はスミス以來リカードゥ及びマルサスの中に發展せるものであるが、後者はマルサスにその端を發する事が、略々明かになつた。

そこで、次には更に進んで、此のマルサスの動態理論に就いて評價するの仕事に移るであらう。

#### 第一節 一般的過剰生産——『恐慌』の可能性

前述の如く、リカードゥは、生産物は生産物或ひは奉仕に對して賣られると言ふ風に、交換せられる商品に於ける使用價値の差異に基く單純なる物々交換が行はれ、貨幣は單なる流通の媒介手段に過ぎず、従つて此處には一般的過剰生産は生じ得ない、と言ふ。此の様な『生産即消費説』は、既に J. B. Say の『販路説』<sup>1)</sup> theorie des débouchés<sup>1)</sup> に於いて見出され得るものであるが、尙ほ彼以前に於いても本質的には Tucker,<sup>2)</sup> Quesnay,<sup>3)</sup> Mercier de la Rivière,<sup>4)</sup> James Mill<sup>5)</sup> 等に於いても論ぜられて居る。又、リカードゥ以後に於いては J. S. Mill,<sup>6)</sup>

- 1) J. B. Say. Traité d'Economie politique. 1803.
- 2) Tucker, Reflections on the Expediency of a Law for the Naturalisation of Foreign Protestants. 1751.
- 3) Quesnay, Tableau économique. 1766.
- 4) Mercier de la Rivière, L'ordre naturel et essentiel des sociétés politiques. 1767.
- 5) James Mill, Commerce defended. 1807.
- 6) J. S. Mill, Principles of Political Economy. 1848.

Senior<sup>1)</sup> 等がその影響から脱却せずに残つて居る。

此のリカアドゥ説に對して、マルサスは次の如く批判する。

先づ貨幣を考察の外に置く事を難じて曰く、「富は貨幣から成るものでない事は確かに眞理であるが、貨幣が富の分配に於ける最も有力な代理人である事も亦同様に眞理である。凡ての交換が實際に於いて貨幣によつて行はれてゐる國に於いて、需要供給の原理や貸銀利潤の變動を説明するに當つて、依然として帽子・靴・穀物・衣類等に主として關說せんとする人々は、必ずや失敗せざるを得ない、」と。

次に、物々交換論を難じて曰く、「事實として觀ると、商品が常に商品と交換される事は、決して眞理ではない。巨量の商品は、直接に、生産的労働又は個人的奉仕と交換される。そして、此の商品量は、それと交換せらる可き労働と比較すると、在荷過剩<sup>2)</sup>のために價値が下落する。……〔これは〕著しく利潤を低下させ、これ以上の生産をば一時制限するに至る。しかもこれは正確に在荷過剩と云ふ術語によつて意味せられるものであり、此の場合に於いてはそれは明瞭に一般的であつて部分的ではない。……セイ君、ミル君、リカアドゥ君は、此の問題に就いての彼等の見解に於いて根本的誤謬に陥つてゐる、」と。

斯の如きリカアドゥ一統の根本的誤謬は、マルサスに據ると、結局次の如き諸缺陷から發生せるものである。

第一、「彼等は、商品をば單にその相互關係に於いて考察し、消費者の慾望に對する關係に於いては考察しなかつた。」<sup>4)</sup>

- 1) N. W. Senior, An Outline of Political Economy. 1850.
- 2) Malthus, Definitions of Political Economy, p. 60. note; Cf. do., Principles. 1. ed., pp. 361—2. note; & 2. ed., p. 324. note.
- 3) Malthus, Principles. 1 ed. pp. 253—4; 2 ed. p. 316.
- 4) ibid., 1 ed., Summary p. 570; Cf. 1 ed., pp. 355—7; 2 ed., pp. 316—20.

第二、彼等は「重要な人間性」の問題に於いて誤謬を犯し、人は「常に懶惰よりも奢侈を好む」と言ふが、しかし現實の人間性は「奢侈よりも懶惰を好む」ものである。<sup>1)</sup>

第三、「最も重大な誤謬は、蓄積が需要を保證すると假定するに在る。<sup>2)</sup>」然るに、蓄積は消費の節約によつて可能であるから、蓄積と需要とは兩立し難い事になるの外はない。

マルサスが此の様にリカードゥを批判して居るのは、正しい。リカードゥの理論の根柢には、單純商品交換なる事實を一般化すると云ふ事が横たはつて居るのを見る。斯かる交換は、販賣があると共に購買があると云ふ場合以外には行はれないものである。従つて、それは單に生産物即ち使用價値の交易であるに過ぎない。これこそは、正しく、單純商品生産の彼方に横たはる事である。然るに、「資本主義生産の第一條件は、生産物は先づ商品でなければならぬ、従つてそれは貨幣に表現されなければならぬ<sup>3)</sup>」と言ふ事である。従つて、こゝで問題となるのは、商品の使用價値ではなくして、價値及び交換價値でなければならぬ。「資本主義に於いては『他の財貨の取得』が目的であるのではなく、價値の・貨幣の・抽象的富の獲得が目的なのである。<sup>4)</sup>」それ故に、使用價値の交易、物々交換を説くリカードゥにあつては、一般的過剩——恐慌は論理的に否定されざるを得なかつたのである。彼が略々正しい處から出發させた投下勞働價値説も「市場價格と生産價格との關聯に於いて正しい一面を展開しはするが、それは單に競争の現象に出發する表面的なる關聯として飽く迄一面的であり、これを價値そのものから内面的に發展的に展開する事は出来なかつた。従つて、その實際の『價格』即

1) *ibid.*, 1 ed., pp. 358—9; 2 ed., pp. 320—22.

2) *ibid.*, 1 ed., p. 359; 2 ed., p. 322.

3) Karl Marx., *Theorien über den Mehrwert*. II. 2. S. 275. (マ・エ全集、第十卷、p. 293)

4) *ibid.*, II. 2. S. 277 (マ・エ全集、第十卷、p. 297)

ち「市場價格」は斯様に見られる限り價值とは切り離されて居り、その間の關聯が絶たれて居る<sup>1)</sup>。それ故に、斯くの如き價值論をもつリカアドゥから内因的恐慌論即ち一般的過剰生産の理論が展開されるのを期待する事は出来ない。精々彼が認めたのは部分的恐慌に過ぎない。

之に反して、マルサスは専ら交換價值を取扱ひ、しかも需要供給の作用の下に立つ支配労働價值説を主張するが故に、問題は全く價格現象の部面に向けられる。それ故に、彼に於いて始めて、リカアドゥによつて否定せられた一般的過剰生産が肯定せられる事となる。此の關係をば McCracken は次の様に説明する。曰く、「アダム・スミスによつてなされた『自然價值』と『交換價值』との間の區別は、二つの異別なる價值論を發生せしめた様に思はれる。」<sup>2)</sup> 一は投下労働價值説であり、他は需要供給價值説又はその原初の表現を用ひると支配労働價值説である。「リカアドゥは強く投下労働價值概念に傾倒して供給の側から價值の問題に迫つた。之に反して、マルサスは全く支配労働價值の分析を行ふ事によつて需要の側から價值の問題に接近して行つた。」<sup>3)</sup> 斯くの如くにして「景氣循環論の建設的研究は、マルサスによつて始めて形成せられた支配労働價值説の方面から進んで行かれる。マルサスに對して、最初の景氣循環理論家たるの榮譽が與へられる。」<sup>4)</sup> と。事實、一般的過剰生産、即ち恐慌の可能性の認識は、英國古典派の中にあつてはマルサスに負ふ所頗る大である。斯かる認識の方向に於いて、マルサスは Sismondi<sup>5)</sup>、Chalmers<sup>6)</sup> と同一陣營に立籠るものであると言へるであらう。

- 1) 森戸・笠『剩餘價值學說略史』(經濟學全集、第五十卷) p. 240. vgl. Marx, Mehrwert. II. I. S. 60. (邦譯第九卷、p. 85).
- 2) H. L. McCracken, Value Theory and Business Cycles. 1933. p. 3.
- 3) ibid., p. 4.
- 4) ibid., p. 5.
- 5) Simonde de Sismondi, Nouveaux principes d' Economie politique. 1819.
- 6) Thomas Chalmers, On Political Economy, in Connexion with the Moral State and Moral Prospects of Society. 1832.

然るに、古典派の大集成 J. S. Mill<sup>1)</sup>に至つてからは、實際社會に於ける恐慌現象の反覆に刺戟せられて、一般的過剰を認識したが、それはマルサスの意味に於ける生産のそれではなく、單に最も表面的な流通に於ける一般的過剰の周期的發生に過ぎず、此の點に於いてマルサスより一步退歩を示して居るのみならず、又更にその論理的矛盾を示すものとして『生産即消費説』を説く事によつてリカードウ流の許す可からざる誤謬の泥沼に片足を入れる程の大退歩及び矛盾撞着を示して居るのである。

此の様に觀て來ると、英國古典派の動態理論に於けるマルサスの地位は誠に優れたものである、と言はざるを得なくなる。

## 第二節 資本蓄積論の難點

前述せる所によつて、マルサスがリカードウの一般的過剰生産否定の否定に出で、恐慌論の先驅者となつた事は、明かである。恐慌論は、言ふまでもなく、裏面から見た資本蓄積論である。恐慌をば内因的原因 *endo-gene Ursache* から説明せんとするならば、それは正しく蓄積論の問題として取上げなければならぬ。

次に、吾々は、リカードウとマルサスの蓄積論を對照してみる事によつて、兩者俱に蓄積論を問題としながら、何故に一は恐慌を否定し他は之を肯定するの結果となつたか？ を吟味する。

資本の蓄積とは収入が貯へられて資本に追加される事である。此の點に就いては兩者の見解に何の隔りもな

1) John Stuart Mill の動態理論に就いては、紙面の都合により、その説明を割愛せざるを得なかつた。これに就いては、谷口吉彦『ジョン・スチュアート・ミルの恐慌理論』（『經濟學研究』第3卷第4號）參照。

い。然るに、此の追加分の行ふ作用に於いて彼等は袖を分つ。一方、リカードゥにあつては、此の追加分は全く「生産的労働によつて消費される<sup>1)</sup>」と考へられて居るのであるから、それは労働者階級の需要となつてあらはれ、生産は擴張せられ、一般的過剰生産は此の様な蓄積論からは論理的に全然否定せられざるを得なかつたのである。他方、マルサスにあつては、此の追加分は生産的労働に對する需要増加とはなるが、しかし彼等の需要はそれがために増加する事なく、従つて一般的過剰生産は肯定せられる事となるのである。此の事は、既に述べた所<sup>2)</sup>から明かな事である。

然るに、吾々の考へる所によると、否それよりも前に現實の社會の教える所に據ると、資本主義の發生當初から、蓄積資本即ち收入から資本への追加分は、單に可變資本（労働賃銀）のみに轉化されるのではなくして、資本蓄積の進行と共に益々多くの部分が不變資本に轉化される。而して、此の不變資本は、原材料及び労働手段（機械及び建物）から成る。それにも拘らず、リカードゥもマルサスも俱に追加分は全部賃銀に轉化されると考へたのは、極めて非現實的である。凡ての古典派の學者は、社會的生産物は全部毎年資本家又は労働者によつて消費されなければならぬ事を前提としてゐる。だが、その大部分は、斯様な個人的消費には向はないで、寧ろ生産手段の造出に向ふものである。此事を認識しなければ、資本蓄積の問題従つて又恐慌の問題は何等の解決をも見出す事が出来ない。社會的生産物の大部分が生産手段就中固定資本の形成に向ふが故に、資本主義的動態は自ら自己の市場を創り出す。だが、固定資本の増加は、同時に、可變資本の増加を伴ふ。故

1) D. Ricardo, Principles Gonner's ed.. p. 132.  
2) 第二章、第二節 Ricardo. 第三節 Malthus 參照。

に、かゝる場合には消費資料も急速に増大する傾向をもつ。斯かる傾向が擴大に擴大を重ねるに従つて、生産力は一般に市場に於ける消費力を凌駕して、こゝに社會的生產と私的領有との矛盾が極度に達して暴力的にそれが解決せられる過程、即ち恐慌が発生するに至るのである。

此事に就いて、リカードは全然氣付かなかつたと言ふ譯ではないらしい。と言ふのは、彼は『經濟學及び課税の原理』第三版（一八二一年）に至つてから、『機械に就いて』（第三十一章）を挿入して、次の様に述べる程の變化を示して居るからである。曰く、「資本の各々の増大と共に、そのヨリ大なる部分が機械に使用される。労働に對する需要は、資本の増加と共に、引續き増加するであらうが、それは資本の増加に比例してゝはない。その比率は必然的に遞減的比率であらう。」<sup>1)</sup>と。此の考方を第二十一章「利潤及び利子に及ぼす蓄積の影響」にまで發展させたならば、事態は當然變つて來なければならなかつたであらう。彼はマカロック宛の書翰に於いて、「第三版を印刷するつもりで今現に印刷屋の手に渡つて居る所の・私の前著に於ける蓄積に関する章は、同一理由〔時間の不足〕から、之を書き改める事が出来ないだらうと思ふ。しかし、私に此の章に行くまでの時間があり、且つ之を改善するに足る能力のある事を見出したならば、私は之を試みせずには居ないであらう。」と述べて、蓄積論修正の意向ある旨を表明して居るが、然し之を實行に移すまでには至らなかつた。それ故に、彼の蓄積論は未熟であり不完全であつたがために、之に基く彼の一般的過剰生産否定論が発生せざるを得なかつた。彼が認めたのは部分的過剰生産である。彼はマルサスへの書翰に於いて、「資本の過多

1) Ricardo, op. cit., p. 387.

2) Letters of Ricardo to McCulloch. 1816—1823. edited by Hollander. 1895. (Jan. 25, 1821.) p. 94.

及び労働の低価格と共に、良き利潤を生む仕事が無くなると云ふ事はない。そして、若しも優れたる英才が一國の資本の配置をその支配下に置くならば、彼は忽ち取引をば以前と同様に活動的ならしめるであらう。人間は彼等の生産に於いて誤謬を犯す。が、需要の缺乏と云ふものはないのである<sup>1)</sup>と述べて居るが、之は正しく Bergmann の謂ふが如く「販賣停滯となつて現はれて来る國民經濟の停滯をば、専ら生産部面からのみ導き出さんとする見解の特徴的表現ではあるまいか。」<sup>2)</sup>此の生産部面に於ける資本蓄積から出發して、後世の恐慌理論が一般的過剰生産の可能性のみならず、又その必然性をも展開するに至つたのである。しかし、リカアドゥは、その價值論の不具のために、従つて又その蓄積論の未熟の故に、恐慌論に於いて良き實を結ぶには至らなかつたけれども、彼が最後まで此の部面に踏み止つた事は、偉とするに足るであらう。

之に反して、マルサスは、リカアドゥが前記の書翰に於いて明かに否定せる『需要の不足』を問題とする事によつて、最も根源的な生産部面から浮かび上つて、生産せられたものが流通する部面、即ち需要と供給とがふれ合ふ部面に於いて、恐慌の問題を取扱ふ事となり、そこから一般的過剰生産の可能性を導き出すの途を撰ばざるを得なくなつたのである。故に、Rosa Luxemburg の批判するが如く、「マルサスは、再生産問題に何等特別な寄與もしなければ、またそれを理解しもしなかつた。彼は、そのリカアドゥとの論争に於いて、恰もリカアドゥ一派とシスモンディとの論争に於けると同様に、主として單純商品交換の概念の中で堂々廻りをして居る。彼とリカアドゥ學派との争に於いては、剩餘價值寄生者の不生産的消費が問題であつた。それは、

1) Letters of Ricardo to Malthus. 1810—1823. edited by J. Bonar. 1887. (10. Oct., 1820) p. 174.

2) Eugen von Bergmann, Geschichte der Nationalökonomischen Krisentheorien. 1895. S. 93—94.



剩餘價值分配に關する口論であつて、資本主義的再生産の社會的根據に關する論争ではなかつたのである。<sup>1)</sup> 資本蓄積に關するリカアドゥとマルサスとの見解の差異は斯くの如くである。従つて、既にのべた所によつて明かなるが如く、リカアドゥにあつては、蓄積の極限は利潤遞減の法則から演繹されて、恐らくは遠い未來に於いて唯一回限りより到來せず、しかもそれは理想的靜止状態であつて、恐慌ではない事になる。然るに、マルサスに於いては、需要と供給との喰ひ違ひ即ち資本蓄積による生産過剰が或る條件の下に於いて發生する可能性があるのであるから、蓄積の極限は一回限りではなく繰り返して現實に發生する可能性のある恐慌であると云ふ事になる。斯様に、生産擴張の行詰りは、リカアドゥに於いては否定せられ、マルサスに於いては肯定せられる事となつた。

併し乍ら、「此の價值を保つためには、生産物の有効なる分配がなされなければならず、又消費せらる可き物と消費者の數・欲望及び消費者の資力との間に、換言すれば商品の供給とその需要との間に、適當な比例が保たれなければならぬと云ふ事が必要である<sup>2)</sup>」と言ふマルサスに於いては、常に、富の分量と價值、生産と消費、需要と供給とが相互對立の關係に於いて考察されて居る。従つて、人口對食物の關係に於ける人口理論と相並んで、供給對需要の關係に於ける動態理論が生れる。そして、前者に於ける貧窮が道德的抑制によつて緩和されるが如く、後者に於ける恐慌は「分配政策」によつて緩和され得る事となるのである。それ故に、マルサスに於いてすら、此の兩者の均衡そのものに多くの關心を向け、その破壊に基く變動の方面には主力を注

- 1) Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals. Gesammelte Werke. Band VI. 1923. S. 166.
- 2) Malthus, Principles, 1 ed., p. 419; 2 ed., p. 365.

いで居ない。そして、均衡が破れる限りに於いて、一般的過剰生産——恐慌の可能性が問題となるに止る。

### 第三節 一般的過剰生産の相對性——『過少消費説』

前述の如く、マルサスは、單に一般的過剰生産の可能性を説くに止り、その必然性を究明する所に行かなかつた。谷口教授の言ふが如く、「恐慌は、資本主義組織の下に於いては不可避免的必然的現象であるとなすが如きは、當時の社會的存在に於て、また古典派に共通な根底に立つマルサスにおいて、考へ得べからざる所である。彼の恐慌論は、言はゞ相對的恐慌論であり、或る條件の下に於ける一般的恐慌の成立を肯定し、また現實に存在する恐慌を率直に認識しようとするに過ぎない。」<sup>1)</sup> マルサスの一般的過剰生産即ち一般的恐慌は、たゞ生産上の諸要因のみが作用する一定の條件の下に於いてのみ、可能であるに過ぎず、従つて斯かる供給に對して需要の増進が行はれる限り生産は過剰とはなり得ず、それ故に恐慌は相對性を有する事となる。若しも消費が生産に及ばない場合、即ち需要が供給より少ない場合には、生産と消費との均衡は破れ、消費不足の故に恐慌が勃發する事となる。斯かる意味に於いて、マルサスはシスモンディと共に『過少消費説』の先驅として遇せらる可きである。此の説は、<sup>2)</sup> Rodbertus によつて發展せられ、それが <sup>3)</sup> K. Kautsky, <sup>4)</sup> Rosa Luxemburg, <sup>5)</sup> Sternberg, <sup>6)</sup> Löwe 等によつて

- 1) 谷口吉彦『恐慌學説』p. 192—3.
- 2) C. Rodbertus-Jagetow, Sociale Briefe an Kirchmann. Erster Brief. 1850.
- 3) Karl Kautsky, Krisentheorien, „Neue Zeit,” Bd. 20. II. (1901—2) Nr. 2. 3. 4. 5.
- 4) Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals. 1912.
- 5) F. Sternberg, Der Imperialismus. 1925; Der Imperialismus und seiner Kritiker. 1929.
- 6) Adolf Löwe, Der gegenwärtige Stand der Konjunkturforschung in Deutschland. (Festgabe für Brentano. 2. Bd. 1925).

繼承せられた。又、此の流れとは別に Hobson,<sup>1)</sup> Henderson,<sup>2)</sup> Martin,<sup>3)</sup> Foster and Catchings,<sup>4)</sup> Powell<sup>5)</sup> 等によつても發展せしめられた。加之、最近、此の説は、貨幣的要素の意義を重視する Keynes,<sup>6)</sup> Hayek<sup>7)</sup> 等の現代流行の貨幣的景氣理論にも、多大の影響を與へてゐる。

然るに、過少消費説は、一般に、次の如き難點を有してゐる。

(1) 「不充分なる消費（恐慌を説明するかの如く見える）は、汎ゆる種類の經濟制度に存在したが、恐慌は唯一つの制度——資本主義的制度の特徵的徵表をなす。」従つて、過少消費を以つて恐慌の原因となすならば、恐慌は前資本主義の時代にも存在した常住不斷の現象となるから、此の説は十九世紀以來の資本主義的な新しき恐慌をば過少消費と云ふ古き現象から説明せんとするの誤謬に陥る事となる。

(2) 「恐慌は支拂能力ある消費又は支拂能力ある消費者の不足から生ずると説く事は、單なる同語反覆である。元來、乞食又は『泥棒』の消費を除く外、支拂能力ある消費以外の消費と云ふものは、資本主義の知らざる所である。商品が賣れないとすれば、それは、その商品が終局に於いて生産的消費のために購買せられるにせよ、又は個人的消費のために購買せられるにせよ、兎に角支拂能力ある購買者が、従つて消費者が缺如して居ると云ふ事に外ならない。」此の様に過少消費は恐慌の原因たり得ないのみならず、又現實の社會を觀察すると恐慌に先行する時期には賃銀、従つて大衆の消費が一

- 1) J. A. Hobson, Economics of Unemployment. 1922; Poverty in Plenty. 1931.
- 2) Fred Henderson, Money Power.
- 3) P. W. Martin, Problem of Maintaining Purchasing Power.
- 4) Foster and Catings, Profits. 1925; Money. 1923.
- 5) A. E. Powell, The Flow Theory of Economics. 1931.
- 6) J. M. Keynes, A Treatise on Money. 1930.
- 7) Friedrich A. Hayek, Preise und Produktion. 1931.
- 8) 河野譯『浪漫派經濟學批判』p. 57.
- 9) K. Marx. Das Kapital. II. Band (Volksausgabe) S. 350 高島譯『資本論』第二卷（改造社版）p. 369.

般に増大してゐるのであるから、此の説の妥當性は失はれる事となる。要するに、恐慌を過少消費から説明する事は、恐慌の現象形態をば直接に其の現象形態から説明する事になる。これは、明かに同語反覆であつて、これによつて恐慌の原因は少しも説明され得ないのである。

(3) 「過少消費説は、過剰生産は消費財の全領域に存在する、と主張する。」<sup>1)</sup> 従つて、此の説は、Durbin の言によると、「汎ゆるタイプの貯蓄は、災厄であり、消費財の生産に於ける貨幣的均衡を必然的に破壊せざるを得ない事を示し、」「資本財に對する需要は、消費財に對する需要から引き出される」<sup>2)</sup> 事になつて、此處に暗礁にのり上げるが故に、「投資が可能ならしむる物質的生産力増大の効果を等閑視する」<sup>4)</sup> 事になるの外はない。併し乍ら、既に指摘せるが如く、資本蓄積の主要なる物質的基礎をなすものは、生産財の方面にある。過少消費説は、此の點を看過し、資本蓄積のメカニズムを理解せざる結果、消費をば直接的消費財の消費のみに極限するの誤謬に陥つて居るのである。<sup>5)</sup>

(4) 斯くの如く恐慌の窮局の原因をば資本主義的生産關係に於ける根本的矛盾に求める事なく單にその一の現象形態たるに過ぎぬ所の消費財生産と個人的消費との矛盾に求める事は、恐慌をば、生産過程に於いてはなく、流通過程に於いて「需要の立遅れ」と云ふ所得分配のメカニズムから出發して觀察する事を意味する。ところが、分配とか流通とか云ふ事は、資本主義的生産の諸條件によつて規定されるものであるから、吾々は景氣變動——従つて又恐慌をば先づ再生産過程から出發して研究

- 1) H. Neisser, General Overproduction: A Study of Say's Law of Markets. (Journal of Pol. Economy, Vol. XLII. No. 4.) p. 460.
- 2) E. F. M. Durbin, Purchasing Power and Trade Depression: A Critique of Under-Consumption Theories. 1933. p. 79.
- 3) ibid., p. 105.
- 4) ibid., p. 79.
- 5) vgl. Hellmut Gottschalk, Die Kaufkraftlehre, Eine Kritik der Unterverbrauchslehren von J. A. Hobson, E. Lederer, W. T. Foster und W. Catings. („Beiträge zur Erforschung der wirtschaftlichen Wechsellagen etc. herausg. von A. Spiethoff" Heft 5. 1932.)

しなければならぬ。さればとて、吾々は生産と消費との間の矛盾、従つて又過少消費なる事實を拒否するものではない。吾々と雖も完全に此の事實を認める。だが、之に對しては、從屬的地位を與へるにすぎないのである。

畢竟するに、過少消費説は、恐慌の現象形態の一面のみに囚はれ、それが如何なる必然性を以つて根本的矛盾から展開されるに至るかを看過して居ると云はざるを得ないのである。

#### 第四節 價值論と景氣變動

然らば、何故に、マルサスは、斯かる過少消費説を根基として相對的なる一般的過剰生産を説くに止つたか？ 何故に、彼は恐慌の必然性を認識するに至らなかつたか？ 何故に、彼は恐慌論乃至景氣變動論をば真正にその窮局の原因にまで掘り下げて説明する事が出来なかつたか？

此の間に對して良き答を與へるためには、當然、價值論にまで遡つて吟味しなければならない事は、既に述べ來つた所から推察され得るであらう。

マルサスは、汎ゆる原理中の第一の最大の最も普遍的な原理たる「需要供給の法則」をば、その「價值論」にも適用する事によつて、専ら「需要供給價值説」(又は「支配勞働價值説」)に據り、リカードゥに於けるが如く絶對價值又は自然價值の様な「價值」の問題を問題とせず、單に相對的價值又は市場價格の様な「價格」

の問題のみを問題としたに過ぎなかつた。堀博士の言を借りると、「マルサスは、徹頭徹尾實際現象の説明にのみ努め、内部的諸關係の攻究と云ふが如きことを全く念頭に置かなかつた。……彼の價值論に於いて重きを置かれたものは價值の原因に關する學說にあらすして、價值の尺度に關するものであつたのである<sup>1)</sup>。」此の點に於いて、マルサスの價值論は大なる難點を内在せしめる。従つて、此の事は、必然的に、彼の動態理論にも弱點及び缺陷を與へずには置かない。

『需要供給價值説』によると、商品の交換價值の變動は、需要供給關係の變動する場合に於いてのみ可能なのである。然るに、吾々の考へる所に據ると、W. Liebknecht の謂ふが如く、「需要の強度は、商品の價值騰貴の原因ではなく、これは實際上交換價值の上昇の *Conditio sine qua non* (不可避的條件) たるに過ぎない。」<sup>2)</sup> 價值の原因は、『社會的必要勞働』に在る。『價值』(即ち、リカードの投下勞働)と『市場價格』(即ち、マルサスの支配勞働)とが實際上一致しないからと言つて、直ちに、マルサスの如く、『投下勞働量』又は『生産費』は價值決定原因たり得ない、と否定し去るには及ばない。

リープクネヒトは、需要供給説を批判して曰ふ、「需要供給は、價值問題の解決に充分間に合ふものではない。或は商品が平均的價格以上又は以下で賣られる時には、需要と供給とは常に相互に不均衡の状態にあると解せられもする。此の場合、需要供給關係は、全く交換價值と(價格が常にそれに求引される所の)平均的交換價值との偏差を説明するが、然し此の場合には——假定に従つて——需要と供給とが一致するが故に、此の

1) 堀經夫『リカードの價值論及び其の批判史』pp. 26—2.

2) W. Liebknecht, Zur Geschichte der Werttheorie in England. 1902. S. 84.

中心價值自體が何によつて決定されるかを説明しない。或ひは又、需要供給間に傾向的に常に存立してゐる均衡が主張される。此の場合、需要供給關係は、市場價格と中心價格との偏差は何に依存するか、又中心價格自體は何に依存するかを説明しない。従つて、各々の場合に於いて、此等の現象の説明のためには、他の要素を考慮に入れなければならない<sup>1)</sup>。」と。

需要供給説は、「價值」又は「中心價值」の原因を少しも説明するものではない。従つて、「價值」論を缺く所のマルサスの需要供給説即ち價格論は、空中樓閣の如き根底なき表面上の現象たるを失はないであらう。加之、彼の説く「支配労働價值説」は、既に交換を前提として始めて發生し得るものであるが、此の事は既に兩者の中に於ける等量の價值を假定として前提しなければならぬ苦境に導くか、或は商品の價值によつて價值を決定すると言ふ循環に陥るの外はない。所で、先づ、豫め等量の價值を兩者の中に假定する事は、價值の原因に就いて全く何等の論理的發展をも齎らすものではない。次に、需要が商品の交換價值の原因であるとするならば、交換せられる二つの財貨は願望せられて交換せられる時に於いて始めて各々それに相應する交換價值を獲得する事となるが、これは事實に反するのみならず、又明かに無意味なる循環である。是は、「原因」と「條件」とを混同する事から生ずる矛盾である。

此の矛盾の擔ひ手たるマルサスは、彼の「價值論」から導き出された俗學的な剩餘價值論——それは、資本主義的利潤を商品價值の騰貴から説明するものである——から出發する事によつて、「赤裸々に、蓄積は生産

1) *ibid.*, S. 86.

の唯一の目的であると公言する、そして、資本家側に於ける無限の蓄積を代辯し、これをその寄生者達の無限の消費によつて補充し保證しようとする<sup>1)</sup>。商品の「價值」の本質にまで掘り下げてこれを正しく把握すると言ふ方向に進まなかつたマルサスは、眞正なる價值論を排除せるがために、資本蓄積の問題を再生産行程の分析に於いて正しく展開するに至らず、従つて又景氣變動をば根本的原因にまで溯源して究明する事を等閑視するの止むなきに立ち到つたのである。

斯く論じ來ると、マルサスの關心を有するのは價格であるから、斯かる意味に於ける「需要供給説」とリカアドゥ流の「勞働價值説」とは決して同一水準に立つ學説ではあり得ない事が、明かになる。吾々は、堀博士と共に、「リカアドゥの學説は價值決定の原因の探究を主眼とするものなるに反し、マルサスのそれは既成の價值の大小を測る尺度の發見を目的とするものであるから、これ等兩説を對立せしむるのは、從來の多くの學者の爲し來つた所ではあるが、聊か當を得て居ない様に思はれる。」<sup>2)</sup>と云ふ事が出来る。

前述のマッククラッケンも、投下價值説 (Embodied Value Theory) と支配價值説 (Commanded Value Theory) とを同一水準に置いて論じて居る。それ故に、彼は、「若しも吾々の分析が正しいならば、如何なる投下勞働價值論者と雖も、論理的に景氣循環を説明する事は出来ないであらう<sup>3)</sup>」と強調する。しかし、これは、全く當を得ないものであると言はざるを得ない。勿論、リカアドゥに於けるが如く、未完成なる價值論——即ち、價值から價格への發展の未熟なる「投下勞働價值説」にあつては、その價值論の不完全の故に、又問題の取扱

1) R. Luxemburg, op. cit., S. 163.

2) 堀經夫、前掲書、p. 270.

3) McCracken. op. cit., p. 5.



方の不適當なりしたために、今日見るが如き恐慌論の成立を見る事が出来なかつたと云ふ具體的な實例はあるけれども、しかし此の事は決して『労働價值説』一般に妥當するものではあり得ない。幾多の點に於いて不充分であり矛盾を内包せるリカアドゥの労働價值説をば完成の域にまでもつて行つたのは、Karl Marxである。此の點に就いては、優れたる研究が多く存在するから、此處ではこれ以上立ち入る必要を見ないであらう、<sup>1)</sup>彼は、労働價值説に基いて『價值』論から『價格』論への架橋工作を完成させた。彼に於いて、リカアドゥが沈思した礎石的な下部段階と、マルサスの立つた實際社會の見える上部段階とは、成功的に連絡され、それによつて經濟社會の法則が明かにせられ得る様になつた。それ故に、吾々は、斯様にして完成された價值及び價格論から出發することによつて始めて、經濟動態或ひは景氣變動の理論の眞正なる把握が可能となる。これによつて、マルサスにあつては未だ望む事の出来なかつた『恐慌の必然性』が明かにせられ、景氣變動の法則が顯現せられ、動態理論が確立せられ得る様になるのである。

(一九三四・九・二三)

1) W. Liebknecht, op. cit.; J. Rosenberg, Ricardo und Marx als Werttheoretiker; K. Marx, Theorien über den Mehrwert; 『堀經夫 リカアドゥの價值論及び其の批判史』; 波多野鼎『價值學說史』第一卷、正統學派の價值學說; 森耕二郎『リカアド價值論の研究』

